



# \*イフパット だより\*

～農民参加なくして農業なし～

## 第31号

### ベトナム草の根技術協力の現地活動始まる



都市開発により一変したソララ市中心部（近代的なショッピングモール）

#### 目次

##### ベトナム草の根技術協力

- ・P 2 現地活動開始報告から 理事 西村 美彦
- ・P 6 トアンチャウ村からのニュース 会長 櫻井 文海

##### IFPaT事務局長交替に寄せる

- ・P 6 事務局長退任のご報告 前事務局長 美馬 巨人
- ・P 7 私のキーワード：おもんばかり（慮る） 新事務局長 浅野 哲

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク

**NPO-IFPaT** International Farmers Participation Technical Net-work

# 草の根技術協力「ベトナム、中山間地域の少数民族農村におけるアグリツーリズムを導入した生計向上モデル事業」の活動開始の報告から

理事 西村 美彦

新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的蔓延で、遅れていた本件草の根プロジェクトも6月に入り、やっと動ける状況になってきた。JICAとの契約が結ばれてすでに約1年が過ぎてしまった。現地活動が出来なかった1年間はメールやオンラインでの現地状況の把握やカウンターパート（C/P）による農民研修が行われただけで、具体的な活動はできなかった。早速に第1回目の現地渡航が実施され、実質的な活動が開始された。そこで、最初の現地での活動を通して、ソラ市の現況とプロジェクトの現状、今後の活動について報告する。なお、本プロジェクトの概要については2021年6月10日の「イフパットだより第27号」で詳細に報告しているので、これを参照にしていいただければと思う。



写真1. ソラ省新庁舎と公園

まず、ソラ市の現地に着いて感じた街の外観の印象は思っていたほど変わっていないことであった。しかしながらやはり、COVID-19の影響で人々の動きや店の賑わいは2年半前ほどではなかった。最後に訪れたのがプロジェクト形成調査を終えた、COVID-19が出始める直前の2019年12月で、地方の開発事業が優先されていた時でもあった。当時ソラ市では大型都市開発が行われて、州庁舎が新たに移築されて、新しい敷地は立派な庁舎も含め公園として整備された。また、初めての大型ショッピングモールの建設や高級住宅地開発も進んでいた。この開発の動きの一部は継続され、河川整備や高級住宅地建設の2番目の計画が進んでいた。しかし、

前よりは街での人出は多くなかった。また、街の飲食店はオーナーが変わったり、新たな近代的な店が出来たりしているが、以前ほどの宴会を見ることは少なくなっていた。これもCOVID-19の影響であろう。

市の中心部は変わっているが農村部は依然それほど大きく変わっているわけではない。プロジェクトの対象村であるポー村でも大きな変化はないようであった。ただ対象農民で民泊を行っているメンバーは施設の拡大・充実を独自に行っていたが、後のメンバーの状況は大きく変わっていなかった。このような状況把握で早速現地活動を開始した。

現地では初日にソラ省人民委員会副主席のコーン(Cong)氏を表敬訪問した。彼は第1フェーズの草の根案件の時に農業農村開発局(DARD)の局長であり、すでに面識があったので、我々のことを覚えていてくれた。DARD副局長でプロジェクトのマネージャーであるMs.フォン氏も同席して、当方櫻井と西村が面談を行った。プロジェクトの目的の説明に限らず、前のプロジェクトや笠間市の山口市長などの話で花を咲かせた。コーン氏は気さくな方でプロジェクトの経緯も知っていることで、ソラ省政府の対応に関し安堵した。副主席の執務室は庁舎上階の9階にあり、まだ真新しい部屋での面談となり、以前のオフィスと比べ格式の違いを実感した。



写真2. ソラ省人民委員会副主席(左2人目)を表敬

早速ポー村での活動について話をしたい。初日はポー村での関係者全員、村の集会場に集まった。

関係機関のC/Pも参加し、村からは村長や活動グループのリーダーが参加した。プロジェクトの今まで面識のなかった機関からも出席があった。というのは事前調査以来一度も関係者と会っていないので、面識のない人も多かった。ソラ市から副市長（副主席）、文化・スポーツ・観光局の副局長の参加があった。プロジェクトの関係機関は農業・農村開発局、文化・スポーツ・観光局、ソラ市、タイバク大学（TBU）の4機関で農業観光プロジェクト・ユニット（ATPU）委員会を作っているが、今回の集まりを見ていると心強いと感じると同時にまとめていくのが大変そうであると感じた。ともかくこれが草の根フェーズ2の出発点である。



写真3. 3者の打ち合わせ

最初のポー村での農民とATPUメンバー、日本側メンバーとの話し合いが行われ、どのように活動を進めていくが話し合われた。ポー村での話し合いは村長を中心に活動を進めていくことに積極的であることが確認できた。現在ポー村では具体的な活動に対して3グループが設置されている。各グループの方針と対応策については下記の通りである。

#### （1）農業野菜グループ

メンバーは現在10人で、このうち5人がネットハウスによる野菜栽培を希望している。プロジェクトとしてはこの活動を優先し、進めることにした。活動圃場は湧水が出て水利条件は良い棚地となっているため、小規模の耕地であることからネットハウスにならざるを得ず、予算上のハウス規模からこれよりも小規模のハウスを数個設置とすることにした。このハウス設置はではプロジェクトとして、竹ネットハウスとすることを提案した結果、農民は非常に興味を持った。前例のタム村と同様に農民がハウスのフレームを作れば



写真4. 野菜栽培圃場



写真5. 湧水地（中央のコンクリート囲い）

ビニールフィルムとネットをプロジェクトが提供することにした。なお、指導はDARDとTBUで行う手法が検討されている。

#### （2）農業花卉グループ活動

メンバーは現在3人であるが、圃場で花の栽培・販売を行う人と、花栽培を民宿の鑑賞用（デコ



写真6. 花卉栽培農家・兼販売所



写真7. 花卉栽培圃場

レーション) や観光スポットにしたい人がいて、目的が異なるため2サブグループに分けて活動を進めることにした。まず花卉栽培中心のグループは現在1農家が庭での栽培とポットでの栽培を行い、苗や鉢を販売している。そのために栽培指導としては野菜栽培と同じなので、野菜栽培グループと共同の活動として進めることにした。また、花卉の展示、鑑賞用(デコレーション)を目的としたいグループは民宿を行っているメンバーで、この1メンバーの民宿をモデルとして宿泊施設に隣接した観光目的の花ネットハウスを建てる方針とした。特に花卉栽培については有望であることから、市場も含めバリューチェーンを調査して進める必要があると考えている。

### (3) 観光、エコシステムグループ活動

このグループは観光開発を目指す活動を行うグループであり、宿泊やリクレーションの提供など、目的や方法が幅広く手段が異なるので、それぞれの活動をサブグループとして捉えることにした。宿泊関係ではすでに1軒の民宿が活動しているが、利用者はまだ多くない。また、観光地として視察地、リクレーション地として整備されていない。村には湧水があり、自然が豊かなことからこの条件を利用した遊水池の利用、見物地の整備などで観光地として開発したいとの意気込みがある。そこで、各サブグループの活動を紹介したい。

#### ① 民宿サブグループ

現在2軒の民宿と建設中の1軒の民宿がある。しかし実質的には1軒の民宿が活動しているだけであるが、このオーナーは最も村の観光開発を望んでいる人物であり、積極的に活動に取り組んでいる村の

有力者である。彼がグループの中心となり、民宿の改善を図り、来村者を呼び寄せたいと考えている。民宿の整備として宿泊施設に限らず、食事の改善、宿泊と娯楽、花による憩いの場の提供など多岐の活動を考えており、すでに自費で宴会場など拡大している。グループの議論として村全体の観光を行うために、とりあえずこの民泊をモデルとして整備することにしている。また、文化的活動も含め民族舞踊などの充実を図る方向も出されている。



写真8. 民宿の食事の用意



写真9. 民宿の宴会場

#### ② Aquaculture & Ecosystemサブグループ (池の魚類を活用したリクレーションの発掘)

豊富な水を利用した遊水池の活用からの観光開発で、現在2名が活動を希望している。グループではリクレーションの開発と共にこの遊水池の環境を考えた持続的な運営管理を行いたいと考えている。そこで2軒の活動を紹介する。

##### — 釣り堀の運営

すでに釣り堀として運営されているが、客はそれほど多くない。週末、祭日や夕方に来る顧客が主となっている。



写真10. スッポンの養殖池



写真11. スッポンの卵

—スッポン養殖の観光化（現地ではスッポンをバーバーと呼んでいる）

スッポン養殖は現地でも珍しいことから、観光としてこの栽培やスッポンの紹介（産卵から親まで）を兼ねるイベントとすることにした。見学に必要な器材のサポートを希望しているが、観光客が来る前に池周辺の整備をすることを優先することにした。また、水の排水、清浄化の問題についても検討することにした。この2軒は隣接する敷地にあることから、とりあえず共同でお客のための入り口、道路の整備を行うことにした。

③Heritage tourism サブグループ（文化・自然資源、戦跡等観光スポット紹介）

この活動はまだ具体的にグループが形成されていないが、すでに民族舞踊などが青年グループ、婦人グループで行われているのでこれらのグループをまとめた文化継承グループの発起が必要である。また、観光局を退職した人が参加したので、今後、村の観光ガイドとして彼を中心に観光資源の開発を行う。村人の中には、湧き水を利用した観光、ベトナム戦争中

の攻撃を受けた土地の歴史などヘリテージ・ツーリズムに関心を持っている人が多くいて、彼らの参加が期待できる。

上記の3グループのほかに今後さらに多種多様な活動グループが出来ると想定されるので、適宜活動を支援する形態を作っていくことになる。また、村の観光センター設置をする意向が村から出た。場所はいま使われていない村の旧保健センターを改善して、設置したいとの意向が村から示された。もしこれが整備されれば、ここを中心に活動が活性化されると期待される。これからの住民活動が期待できることはうれしい限りである。

また、草の根の第1フェーズで問題であった、村の生産物の販路開発が、第2フェーズでアグルツーリズムを村で展開することにより、新しい形態の生産、販売、憩いの観光の村を構築することにより従来の問題を解決して、人々の生計向上に貢献できればと考えている。

本アプローチは成果が出るまでは大変であるが、村人や関係者の意欲を引き出すこと、意識改革を行うことで実現可能であると思っている。



写真12. フェーズ1C/PのTBU先生たちと



写真13.  
笠間市で1年研修したトゥさんと再会 情報交換

## ソラ省トゥアンチャウ村からショート ニュース

会長 櫻井文海

このショートニュースは、2015年から2018年にかけてベトナムのソラ省トゥアンチャウ村とタム村でJICAが行った草の根プロジェクト成果の一つです。

プロジェクト活動の中で茨城県笠間市で約2週間の研修を行いました。笠間市での研修の後、Luong Quoc Huy というタロ芋栽培農家は、トゥアンチャウ村でのタロ芋栽培農家グループと協同組合を設立しました。

Luong Quoc Huyさんは優良農家として認定され、ソラ省、そして中央政府から表彰されました。彼の Facebook ホームページで、彼はこの表彰に対する感謝の意を表しています。

荣誉ある賞は誰のものでもない。

協同組合の創造性を刺激するタロイモの特産品質を保存、開発してくれた トゥアンチャウ村 の人々の英雄的活動と土地に感謝します。

協同組合長の夢を育ててくれたタイバク大学の先生方、日本の専門家の方々に感謝いたします。

協同組合のアイデアの夢を現実のものにしてくれた、タイバク大学の実験センターの白いシャツを着た天使たちに特に感謝します。

改めまして、誠にありがとうございました。



## 事務局長退任のご報告

前事務局長 美馬 巨人

2015年12月から6年8か月間、イフパットの事務局長として大変お世話になりました。

私がイフパットの事務局長の仕事は永井さんから引き継いだ当時、イフパットの事業は大変順調でした。農業機械の長期の基幹研修コースがあり大きな収益になっていましたし、生活改善研修も年2回実施しており、栄養改善研修も始まりました。専門家派遣も複数の収益があり、草の根事業もベトナムとコスタリカで開始されその収益も大きく、イフパットの事業収益は1億円を超え1.25億円となり最高益を更新しました。

就任早々、何の営業努力もせずに最高収益を得ることになり、これが私にとってイフパットで何も仕事することなく過ごすことになり、まずかったのかもしれない。

2019年には、農業機械の基幹研修は終了し研修事業の収益は下がりましたが、生活改善や栄養改善がイフパットの主要研修に育って現在に至っています。今年は、栄養改善の研修が増えるので、担当者の業務過多が心配されます。草の根事業は、この3年はコロナの影響もあり安定した収益は見込めず事業収益の回復は頭打ちになっていますが、今年は回復が見込めそうです。

最近、インターン研修の受け入れにもイフパットは頑張っていて、事業収益にはつながりませんが、イフパットの自主事業の主要な柱として伸ばしていくことが大切だと思います。

JICAで38年、イフパットで7年弱合わせて45年間、国際協力の仕事をしたこととなります。元々は、学生時代、農学部で灌漑技術やリモートセンシング技術で途上国の農業開発が出来ないと、軽い気持ちでその当時の海外技術協力事業団（OTCA）を受けようかと思っていたのですが、就活時の1976年には、国際協力事業団（JICA）に代わっていました。大した勉強もせずにJICAを受験し、ラッキーにもJICAに入ることが出来ました。

国際協力の哲学も特に持たずにやってきましたが、基本は、JICA入団当時の「人づくり」、「国造り」、「心のふれあい」が、国際協力の大切なメッセージだと思います。

初めてのJICAでの海外出張はブラジルのセラード開発でした。初めての海外出張、初めての国際線、3週間のブラジル出張、ブラジリア、サンパウロ、リオデジャネイロ、マナオス、イグアス、ペロオリゾンテと各地を回ることが出来ました。今では、考えられない出張でした。

最初の赴任地はインドネシアでした。リモートセンシングによる農業開発プロジェクトの業務調整員の仕事でした。家族とともに過ごした3年間の在外勤務、インドネシアはやはり一番好きな国と言えます。

その後、赴任した中国やナイジェリアのJICA事務所も楽しい思い出です。大国の中国、初めてのアフリカも素晴らしい経験になりました。

最後にGAP専門家で赴任したラオスも、専門外の専門家業務でしたが良い経験になりました。いずれも、現地で現地の人たちと一緒に仕事をしてその国が好きになれることが一番大切なことと思います。

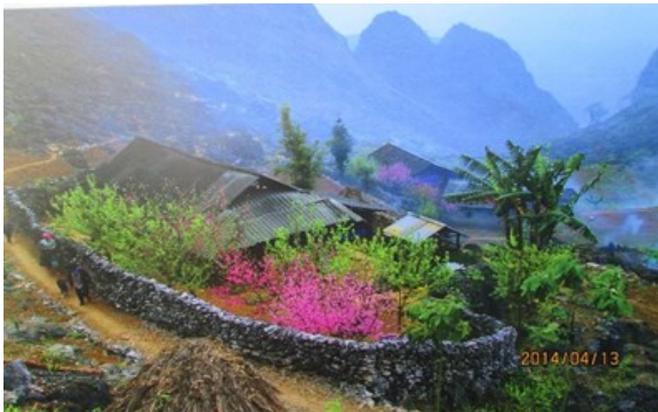


写真. ラオスの山村風景

大した貢献も出来ず、永井事務局長から引き継いだイフパットの財産も拡大出来ずに申し訳ありませんでした。もう少し早く、浅野さんに引き継いでいれば良かったと反省しています。今後は、浅野事務局長の手腕に期待したいと思います。新陳代謝は大切で、組織の若返り（4歳の若返り）も重要です。浅野事務局長も、すでに着々と仕事をしていただき、イフパットも新しく動き出しています。

今後は、イフパットの監事補佐役のポストをいただいておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

## 私のキーワード : おもんばかり（慮る）

### 新事務局長 浅野 哲

こんにちは。この度、新たに参加させていただきました浅野と申します。

冒頭、耳馴染みのない言葉をタイトルとさせていただきましたが、これまでの仕事、生活での思いを籠めた言葉です。

ここ1年以上は、長年の仕事（国際協力関係）をやめ、フリーの立場で、ぜひ取り組みたいと思っていた地元（茨城県南）の中学校、高等学校に出前の授業をさせていただきました。

授業の内容は、それまでの仕事に関係するもので、発展途上国の多様性などに目を向けてもらい、世界中の国同士、どのように相互に関わりあるのか、その中でも、世界の様々な生活環境と、自分たちのそれが、どのように違い、または似ている点があるのか、知って欲しい、興味関心を持ってほしいというのを狙いとしていました。

授業の特徴としては、講師である私から一方的に伝えるのではなく、問いかけることを基本としたもので、双方向になるよう留意。例えば、世界中に、いくつの国があり、それぞれの国が、どのように違うか（経済的な状況、文化多様な状況の一部）、生徒さんたちが知ることを聞き出したりするとともに、経済大国と言われる日本が、何故、国際協力を行うのか、質問し、彼らなりに協力して（小グループで）考えてもらうような進め方をしています。別の言い方では生徒中心の流れを組み立てています。

最近では、『アクティブラーニング※1』ともいわれ、参加型学習の手法を取り入れたものです。生徒さんたち自身が、詳しく知らないことであっても、テレビで見た小さな情報や、どことなく、聞いたことなどから、生徒さん自身で想像力を広げ、考え、気づきを進めてもらうよう、配慮したものです。そのため、クラス内で、少人数のグループを形成してもらい、私からの問いかけに、グループ内で、それぞれの思い、気づき、或いは感想など、話し合ってもらいます。

こうした手法で進めるメリットは、生徒Aさん一人では、知らないこと、分らないことも、クラス内、別の友人たちから、新たに情報を得たり、自分と違うアイデア、モノの見方を聞くことが出来たりすることで、視野

が広がります。また、他者との違いの中から、他人の良いところも気づきます。もちろん、逆に自分の意見を言ってみると、意外に相槌を打ってくれて、自分に自信がわくことも一つ。さらに、生徒さんたち自身が、自分の脳をフル活動し、人の言うことも租借し、いろいろ思考を深めてゆくことで、後々、あの時の意見を出しあって、意見を交換したことは、単に先生から教えられる情報より以上に記憶に残るともいわれています。また、別の機会に、似たような生活場面に出くわし、その場面にいる違う人たちと新たに意見交換を進め、次なる新たな気づきを得られることで、各自、成長につながると思います。

こうした活動を行いたいと考えるに至ったのは、以前の職場での開発支援プログラム実施を通じ、様々な経験をし、都度、試行錯誤し、工夫してきたことが影響していると思います。若い時分は、特に、日本流、日本人としての思考を押し付け、失敗したことなど、後の役に立っていると思います。

ところで、改めて、『日本は、何故、国際協力を実施するのか？』との設問を考えますと、答えは一つではないです。

発展途上国の生活実情には、「安全な水を利用出来ない」、「学校に行きたいのに行けない」など、日本で当然のことが、途上国では、当たり前でなく、人道上の視点があります。

また、外交上のツールとして、日本の国益にもつながる。それ以外に、他国からの支援を得ていたお返しとする歴史的な視点も理由の一つであるといわれます。

理由は、様々ですが、多面的なものの見方を身に着ける。そのことは、国際協力、支援活動を実施する際、その場にいる多様な人たち（地元に住む人、地元の村づくりに携わる役人のほか、支援する組織、人を含め）の思いが反映され、それぞれの人たちの考え方がうまく融合されるようなものであってほしい、そうしたことにつながるように思います。支援活動時に、そうした道筋を作っていくことが大切ではないかというのが、私の気づきです。

そこには、いわゆる『参加型』という基本があります。それぞれ違う立場の人たちの気持ち、考えにたって、進める、そのことが、重要なアプローチではないでしょうか？ 援助する側が、ある意味、自身の

の経験から良かれと思い、一方的に協力を強要（そのつもりがなくても）しても、住民には伝わらないのも伝わらないのではないのでしょうか？ 自分は、同じ土俵に立ち、よくよく周りの人の意見、思いに寄り添い、考えること、それ自身が、「慮る」という言葉だと思っています。

※類似語 = 思い巡らす、寄り添う、押し量る

用語的には、『おもんばかり』という、古臭い表現であるかも知れませんが、根底にある考え方には、古いとか今流とかならないと思います。

註；※1 = アクティブラーニングは、「生涯にわたって学び続ける力」「主体的に考える能力」を備えた人材の育成方法のこと。

2022.2.4 国際協力出前授業を行いました JICAの方を講師に迎え、リモートで実施しました。開発途上国の現状を知り、異文化を理解することで、国際協力活動に少しでも興味を持つことができましたでしょうか。JICAの皆さんありがとうございました。



出前先 茨城県内某高等学校HP掲載から抜粋

## NPO便り第31号に寄せて

編集文責：永井 和夫

イフパットの事務局長が7月に交替しました。美馬前事務局長、ご苦労様でした。そして新たに、元JICA職員の浅野哲さんが事務局長に就任しました。

そして、コロナ禍により現地活動を行なうことができなかった、2つの草の根技術協力の現地活動も開始されました。本31号ではベトナムそして次号ではエルサルバドルの活動報告を掲載します。

### 「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）  
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203  
Tel：029-875-4771 E-mail：info@npoifpat.com